



## 豪雨災害への安全と 豊かな暮らしは両立できるのか

**霞堤**  
歴史的治水の知恵

**調整池**  
現代都市の治水施設

治水をどう社会・暮らし・文化に埋め込むか

治水施設を「防ぐインフラ」にとどめず、  
暮らしの価値を生む空間として再設計する

2

## 気候変動下の治水は空間と社会の課題へ

気候変動	社会変化	流域治水
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 豪雨災害の頻発・激甚化</li> <li>• 想定を超える降雨への対応</li> <li>• インフラ更新・維持管理の負担</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 人口減少・高齢化</li> <li>• 地域活動の担い手不足</li> <li>• 日常生活圏の再編</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 流域全体で水を受け止める</li> <li>• 土地利用・農地・緑地との連携</li> <li>• 市民理解と合意形成が不可欠</li> </ul>

**治水は「技術」だけでなく、  
土地の使い方・暮らし方・地域の合意の問題に**

3

## 2つの事例から考える

**豊川の霞堤**

- 洪水をあえて受け止める歴史的仕組み
- 開発と防災意識の関係
- 受益と負担の非対称性

**柏の葉アクアテラス**

- 都市開発に伴う調整池
- 治水機能と親水空間の両立
- 生活・文化機能の形成

**共通する視点**

- 治水施設を「地域の意味」としてどう共有するか
- 日常利用と防災文化をどう結び直すか
- 流域の受益と負担をどう支え合うか

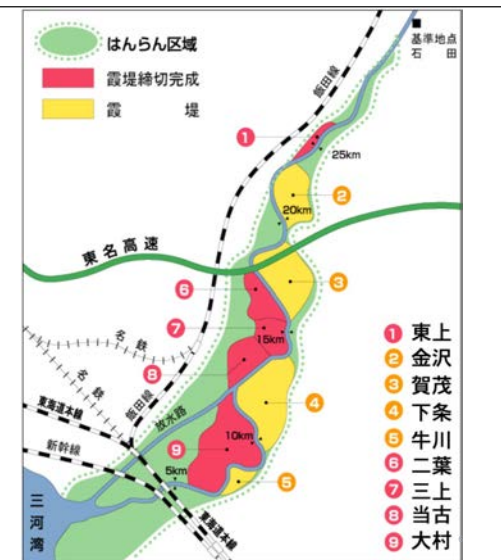
**「守る」だけでなく、「使う」「知る」「支える」治水へ**

4

# 事例1：霞堤

5

## 豊川の霞堤

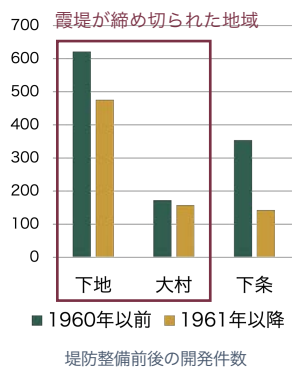


出典：愛知県「19 霞堤（かすみてい）と豊川放水路のお話し」

## 霞堤：堤防整備後に住宅開発が進行

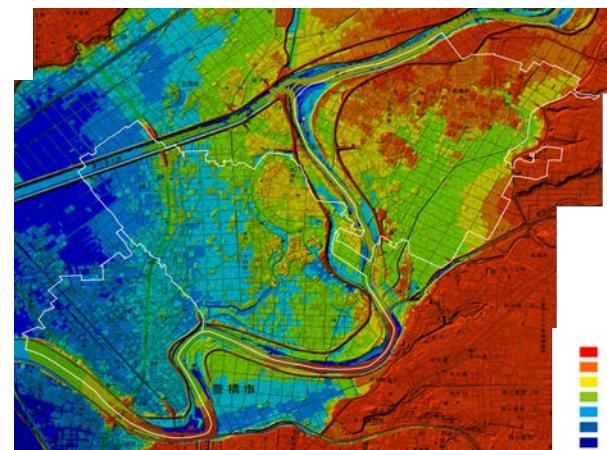


出典：Google Earth

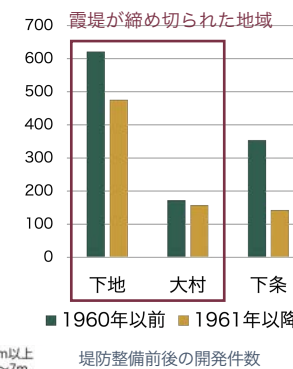


霞堤が締め切られた地域では開発が進んだ

## 霞堤：開発は浸水リスクを抱える地域にも広がった



標高図



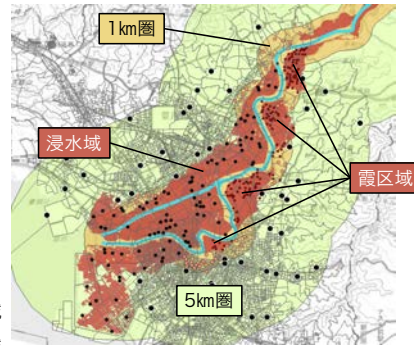
霞堤が締め切られた地域では開発が進んだ

9

## 豊川流域アンケート：霞堤をめぐる認識を把握

### 調査概要

実施期間	2026年2月25日～4月10日
有効回答数	1294 (7.2%)
対象	豊川下流域の住民 (霞区域・浸水域・1km圏・5km圏)
調査項目	水害経験、防災意識、霞堤、遊水地、水辺利用等



**霞区域**：洪水時に水を受け止める地域

**浸水域**：洪水リスクを持ち、霞堤の治水効果も受ける地域

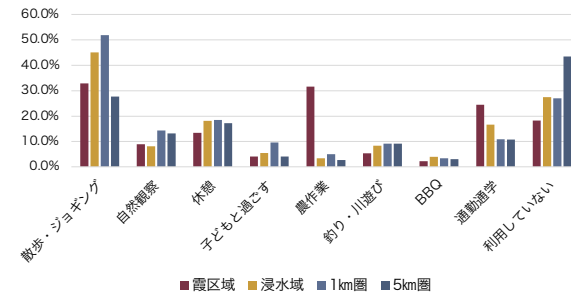
**1km圏**：豊川から1km圏内のうち、浸水リスクの低い地域

**5km圏**：豊川から5km圏内の地域、浸水リスクの低い地域

流域治水を進めるためには、  
住民の「受け止め方」の違いを理解する必要がある。

10

## 霞堤に対する認識：水辺空間の意味の違い



豊川やその周辺空間を利用する主な目的（複数回答）

**霞区域**  
生産や生活と結びついた空間として利用

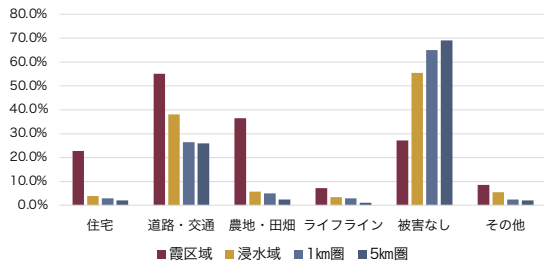
**浸水域**  
日常利用とレクリエーション利用が混在

**1km圏・5km圏**  
散歩や自然観察など親水・レクリエーション利用が中心

河川空間との関わり方には地域差が見られる

11

## 霞堤に対する認識：2023年豪雨における被災経験



2023年6月の大雨での被害（複数回答）

**霞区域**  
住宅・農地・道路など生活基盤への被害が比較的多い

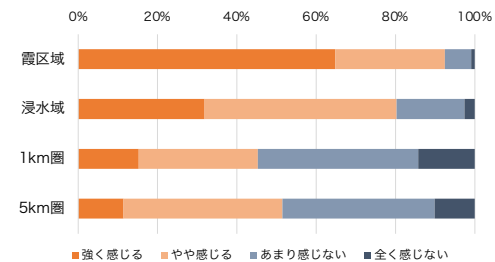
**浸水域**  
道路・交通被害を中心に被害経験が見られる

**1km圏・5km圏**  
「被害なし」の割合が高い

霞区域では生活被害、浸水域では道路浸水が中心となっている

12

## 霞堤に対する認識：洪水リスク認識



洪水被害の危険性の認識

**霞区域**  
洪水リスクを強く認識する割合が高い

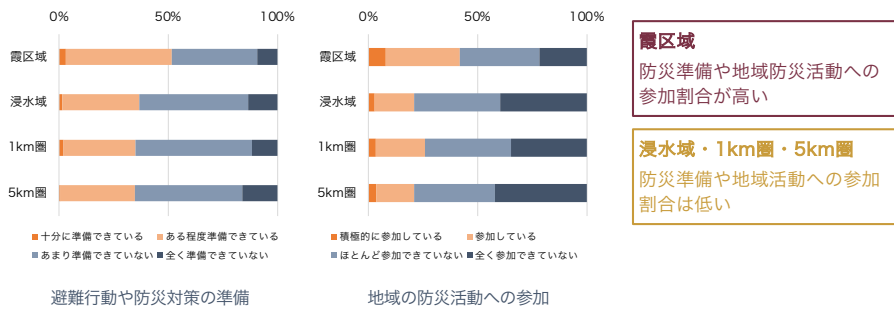
**浸水域**  
リスク認識は高いが、霞区域ほどではない

**1km圏・5km圏**  
相対的にリスク認識が低い

洪水を身近に経験する地域ほど、リスクを強く認識する傾向

13

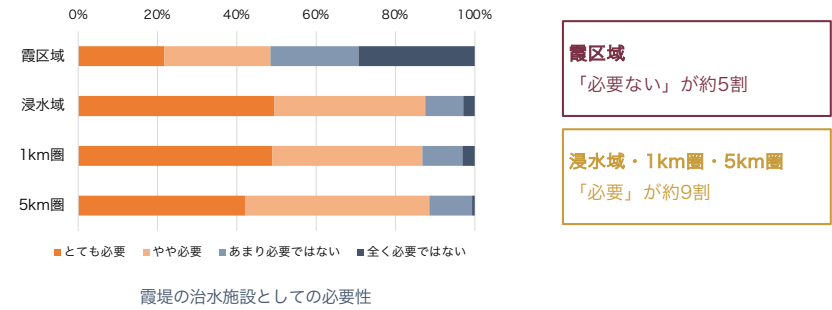
## 霞堤に対する認識：被災経験と防災行動



洪水を身近に経験する地域ほど、防災行動につながる傾向

14

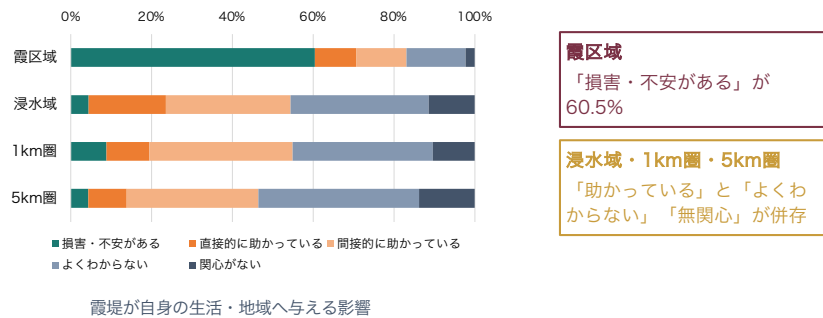
## 霞堤に対する認識：霞堤に対する必要性認識



「洪水を受け止める地域」と「治水効果を受ける地域」とでは、霞堤への必要性認識が異なる

15

## 霞堤に対する認識：受益・負担と関心



「洪水を受け止める地域」と「治水効果を受ける地域」の間では、受益・負担だけでなく、霞堤への理解や関心にも差が見られる

16

## 治水は「流域内の関係性」をどう支えるか

流域内では、洪水との関わり方や受け止め方が異なっている。

受益の可視化

負担への配慮

治水の意味の共有

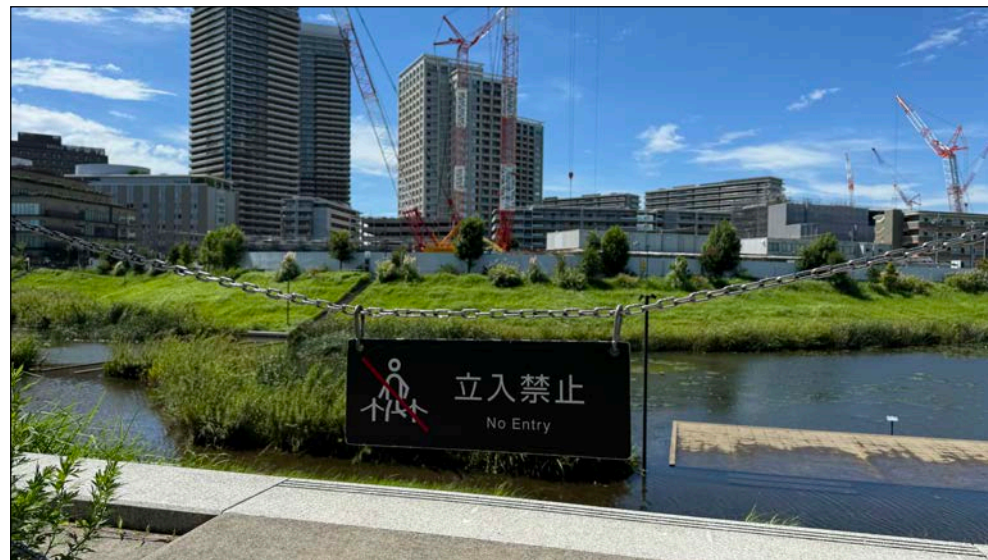
- 誰がどのように支えられているのか
- 流域内の相互依存性を見える化する
- 洪水リスクや生活制約への配慮
- 「洪水を受け止める地域」を流域全体で支える視点
- 霞堤の役割を伝える
- 日常的な学びや地域活動につなげる

洪水との関わり方や経験の違いを踏まえ、「洪水を受け止める地域」を流域全体で支える仕組みへ。

17

## 事例2：調整池

18



## 住民アンケート：アクアテラスをめぐる認識を把握

### 調査概要

実施期間	2024年8月3日～9月30日
対象	調整池周辺住民
有効回答数	462(5.9%)
調査項目	各調整池の認知状況、現状評価、アクアテラス、回答者属性など

### 従来型調整池

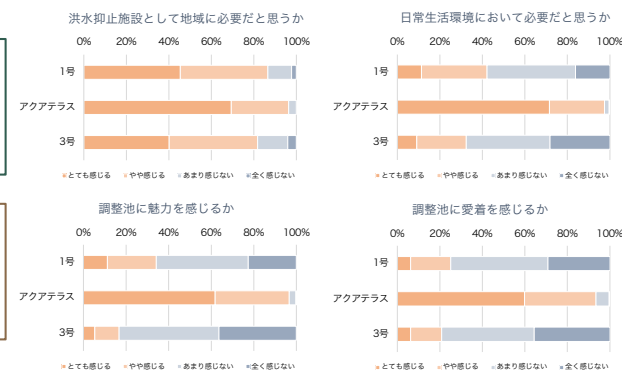


つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅周辺の3つの調整池 21

## 従来型調整池とアクアテラスの評価の違い

**従来型調整池（1号・3号）**  
防災上の必要性は高く認識される一方、日常利用や愛着は限定的

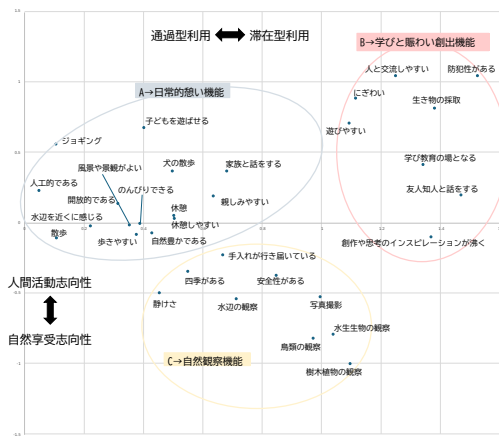
**アクアテラス**  
防災機能に加え、日常利用や魅力・愛着を生み出す生活空間として評価



日常的に利用できることで、治水施設は「防災施設」から「生活空間」へと価値が広がる

22

## アクアテラスの生活・文化機能



数量化Ⅲ類・クラスター分析の結果

### 日常的憩い機能

散歩・休憩・快適さ

### 学びと賑わい創出機能

交流・イベント・教育

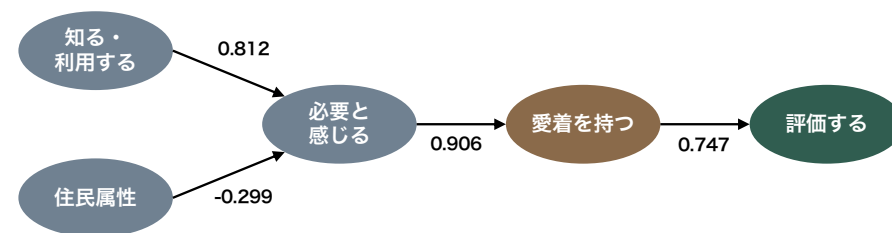
### 自然観察機能

水辺・植生・生物との接触

治水施設が、都市住民の生活の質を高める複合的な場へ

23

## 評価形成の構造：「意味を知る」ことが愛着につながる



アクアテラスの生活・文化的価値の評価構造

利用されるだけでなく、調整池としての意味・役割が理解されることで、愛着と評価が高まる。

25

## 2つの事例が示すこと

### 霞堤

「洪水を受け止める地域」と「治水効果を受ける地域」の認識差

受益と負担の共有

### アクアテラス

調整池が、日常的な憩い・交流・学びの場に

多機能な生活空間

### 共通

治水施設の役割・歴史・意味が住民が理解し、関われること

意味のデザイン

治水とまちづくりをつなぐには、ハード整備と同時に、社会的な理解・関係・合意を設計する必要がある

26

## これからの治水とまちづくりに向けて

### 1. 治水施設を多機能な生活空間として設計する

- 治水機能を維持しながら、憩い・交流・学び・自然観察の場として開く
- 防災インフラと公共空間を接続して計画する

### 2. 防災・治水の役割を伝えるデザインを組み込む

- 「知る・利用する」ことが、必要性・愛着・評価を高める
- 歴史・役割・リスクを日常利用やイベントと結びつける

### 3. 流域内の受益と負担を可視化し、共有する

- 洪水を受け止める地域の不安や負担を、流域全体の課題として扱う
- 公平性や合意形成を踏まえた流域治水を考える

27

---

流域治水とは、水をどこで受け止めるかだけでなく、  
その意味と負担を社会でどう共有するかである。

治水施設を「防ぐインフラ」から  
暮らし・学び・関係を育てる場へ